

村上春樹『アフターダーク』の空間的読解

—「闇」と出会う場所としての深夜の街—

小田匡保

Spatial Analysis of Murakami Haruki's "After Dark":
Midnight town as a place where we encounter the "darkness"

ODA Masayasu

本稿では、村上春樹『アフターダーク』を主に空間的な視点から分析した。登場人物の服装や持ち物の色については、人物の性格に応じてかなり使い分けがされていることが明らかとなる一方で、エリと中国人娼婦との同一性や、白川とマリとの色（＝性格）の共通点も指摘した。作品全体の主な舞台については、現実の渋谷ではなく、渋谷を念頭に置いた架空の場所（筆者はこれを〈渋谷〉とする）が設定されていると推論した。また、登場人物の自宅の位置などを地図化することによって、人物の性格により、〈渋谷〉と自宅との距離や、〈渋谷〉からの方向性などに違いがあることを明らかにした。街内部の施設の位置についても検討し、推定される配置を地図に表した。最後に、中国人組織との接触を手がかりに「闇」との出会いについて考え、特定の場所だけでなく、どこでも「闇」の世界と出会う可能性があることや、深夜の街全体が異界として位置づけられていることなどを述べた。

キーワード：村上春樹、『アフターダーク』、空間、色、都市、文学地理学

Keywords: Murakami Haruki, "After Dark," space, color, town, literary geography

I. はじめに

村上春樹の『アフターダーク』は、女子大学生の浅井マリが夜の街でいろいろな人に出会う、深夜の数時間の物語である。2004年9月に講談社から単行本が刊行され、2006年9月には同じく講談社から文庫本が出版された¹⁾。

1) 本稿では、単行本は2004年9月21日の第4刷、文庫本は2009年8月の第14刷を参照する。文章中の参照ページは、原則として単行本のページである。山崎によれば、村上春樹の作品は版によってテキストの書き換えが見られるという。ジェイ・ルービンも、『ねじまき鳥クロニクル』には文庫版で削除された箇所があると述べているが、『アフターダーク』の本稿の参照部分に関しては、単純ミスの訂正があるのみである。山崎真紀子『村上春樹の本文改稿研究』若草書房、2008。ジェイ・ルービン著、畔柳和代訳『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』新潮社、2006、408-409頁。

筆者は、かねてより、文学作品を地理学の観点から扱うことにいくばくかの関心を持っており、そのような「文学地理学」の動向について検討したこともある²⁾。『アフターダーク』は深夜の都会を舞台にした小説で、都市の具体的描写もあり³⁾、地理的な分析が可能である。本稿においては、『アフターダーク』の舞台となる街を主に空間的観点から読み解き、深夜の街における「闇」との出会いについて考察したい⁴⁾。

『アフターダーク』に関しては、これまでも多くの論考・論評がある⁵⁾。筆者が関心を抱く空間的側面については、東京文学散歩のサイトである「東京紅團」が作品中の施設の現地比定を試みており⁶⁾、注目に値する。浦澄は、村上春樹の作品の舞台を実際に歩いて考察を行なっているが、2000年の論考であるため、『アフターダーク』には触れられていない。ただし、村上の作品における「異界との接点」という観点は、本稿でも参考にしたい⁷⁾。また、松本は村上の作品を「都市小説」だと評するが、「都市」のとらえ方は空間的ではなく、『アフターダーク』についても簡単な言及しかない。ただ、「都市の裏側、あるいは都市の闇」を書いているという指摘は心に留めておきたい⁸⁾。

なお、村上自身には「空間」という言葉へのこだわりはないようで、本作品中での用例は「テーブルの上の空間」(23頁と141頁)、「純粋な抽象概念のような、色のない空間」(158頁)の3か所のみである。したがって、『アフターダーク』の空間的側面について、村上の「空間」の語の用法からアプローチすることは困難であり、さまざまな場所の設定から考察を行なう。

II. 時間設定と登場人物

『アフターダーク』は全部で18の章からなるが、章題はない。時刻や場所、主な登場人物、あらすじは、表1のとおりである。

1. 時間設定

まず時間設定から確認しておく。作品中に年代に関する記述は特になく、村上本人も「時代だって本当はいつでもいいんです」⁹⁾と述べているが、作品が発行された2004年

-
- 2) 小田匡保「文学地理学のゆくえ」、駒澤地理33、1997、101-116頁。
 - 3) 鈴村は「この作品の主人公は(中略)都市、時代と言ってもいいですが、都市と時間とがミックスしたものじゃないか」と述べている。鈴村和成『村上春樹・戦記』彩流社、2009、147-148頁。
 - 4) 主人公の姉、浅井エリの経験する非現実的空間については、原則として考察の枠外とする。
 - 5) たとえば、勝原晴希「暴力装置としての近代——村上春樹『アフターダーク』」日本文学54(1)、2005、81-90頁。
 - 6) 「東京紅團」サイトの「『村上春樹の世界』afterdarkを歩く」(<http://www.tokyo-kurenaidan.com/haruki-afterdark.htm>)。2004.9.18作成、2006.2.22更新、2010.11.26筆者閲覧。
 - 7) 浦澄彬『村上春樹を歩く：作品の舞台と暴力の影』彩流社、2000、82-86頁。
 - 8) 松本健一『村上春樹：都市小説から世界文学へ』第三文明社、2010、132頁。
 - 9) 村上春樹「ロング・インタビュー：「アフターダーク」をめぐって」、文藝界59(4)、2005、177頁。

表1 『アフターダーク』の章別時刻・場所・登場人物等

章	時刻	場所	主な登場人物	あらすじ
1章	午後11時56分～	「デニーズ」	マリ、高橋	デニーズでマリが本を読んでいるところに高橋が入ってきて、マリと出会い、話をする。
2章	午後11時57分～	エリの部屋	エリ、「顔のない男」	エリがベッドで眠っている。テレビが、広い部屋の椅子に腰かけている男を映し出す。
3章	0時25分～	「デニーズ」からホテル「アルファヴィル」まで	マリ、カオル	デニーズでマリが本を読んでいるところにカオルがやって来る。2人でホテル「アルファヴィル」に行く。
		ホテル「アルファヴィル」	マリ、カオル、コムギ、コオロギ、中国人娼婦、中国人組織の男	マリが通訳して、客（白川）に暴力を受けた中国人娼婦の面倒をみる。中国人組織の男がバイクでやって来て、娼婦を連れて帰る。
4章	0時37分～	エリの部屋	エリ、「顔のない男」	エリは部屋のベッドで眠っている。テレビの中のマスクをかぶった男「顔のない男」がエリを見つめている。
5章	1時18分～	バー	マリ、カオル、バーテンダー	カオルがマリをバーに誘い、バーで話す。
	1時56分～	「すかいらく」	マリ	「すかいらく」の洗面所でマリが手を洗い、鏡に映った自分の顔を見つめる。
6章	2時19分～	ホテル「アルファヴィル」	カオル、コムギ、コオロギ、中国人組織の男	ホテル「アルファヴィル」の事務所でカオルとコムギ、コオロギが話をしながら、中国人娼婦に暴行した客（白川）の画像を防犯カメラで見つけ、中国人組織の男に渡す。
7章	2時43分～	白川のオフィス	白川、白川の妻	白川がオフィスで仕事をしているところへ、妻から電話かかかってくる話をする。
		コンビニ	高橋	高橋がコンビニで買い物をし、牛乳を飲み、りんごを食べる。
8章	3時3分～	テレビの中の部屋	エリ、「顔のない男」	エリはテレビの中の部屋のベッドで眠り、それを「顔のない男」が見つめている。
9章	3時7分～	「すかいらく」から公園まで	マリ、高橋	「すかいらく」にマリがいるところに高橋がやって来て話をする。その後、公園へ向かって歩きながら話をする。
10章	3時25分～	テレビの中の部屋	エリ	テレビの中の部屋のベッドでエリが目を覚まし、部屋を一周するが、再び横になる。
11章	3時42分～	公園	マリ、高橋	マリと高橋が公園で話をする。
12章	3時58分～	白川のオフィス、タクシー内、セブンイレブン	白川、タクシー運転手	白川が娼婦から奪ったものをオフィスで確認した後、タクシーで自宅に向かう。途中、奪ったものをセブンイレブンで捨て、携帯電話を店の棚に置く。
13章	4時9分～	公園からホテル「アルファヴィル」まで	マリ、高橋	高橋がマリを公園からホテル「アルファヴィル」に送りながら話す。
14章	4時25分～	エリの部屋	エリ	テレビの画面の内側から、エリがこちらに向かって語りかける。
	4時31分～33分～	白川の家	白川	白川が家のキッチンでプレーンヨーグルトを食べながらテレビを見ている。
15章	4時33分～	ホテル「アルファヴィル」	マリ、コオロギ	マリとコオロギがホテル「アルファヴィル」の客室で身の上話をする。コオロギが部屋から出た後、マリは眠りにつく。
16章	4時52分～	バンドの練習場	高橋、バンド仲間	高橋が一足早く練習を終える。
	5時0分～	白川の家	白川	白川が家のキッチンで眠れずにいる。
	5時7分～	ホテル「アルファヴィル」	マリ	マリがホテル「アルファヴィル」の一室で眠っている。
	5時9分～	エリの部屋	エリ	エリが自分の部屋のベッドで眠っている。
	5時10分～	「セブンイレブン」	高橋、中国人組織の男	「セブンイレブン」で高橋が買い物をしている時に、白川が残した携帯電話が鳴り、手に取る。
17章	5時24分～	公園からホテル「アルファヴィル」まで	高橋、マリ	高橋が公園からマリに電話をし、ホテル「アルファヴィル」に向かって歩いていく。
	5時38分～	通りから駅まで	マリ、高橋	マリと高橋が駅に向かいながら話をし、駅で別れる。
18章	6時40分～	エリの部屋	マリ、エリ	エリの部屋にマリが入ってきて、ベッドで一緒に眠る。
	6時43分～	「セブンイレブン」	店員、中国人組織の男	「セブンイレブン」で携帯電話が鳴り、店員が手に取る。
	6時50分～	都心の街		早朝の都心の情景
	6時52分～	エリの部屋	マリ、エリ	マリとエリがベッドで一緒に眠る。

9月からそれほどさかのぼらない時期が想定される。登場人物の1人コオロギが、神戸の地震のころ、普通のOLをしていたが(226頁)、今は3年近く逃げている(225頁)という記述から、それは裏づけられる¹⁰⁾。

季節は「秋の終わり」(5頁)、「晩秋」(166頁)である。「樹木の落とした葉が、地面が見えないくらいもって」(166頁)いるというから、11月終わりか12月初めにかけてであろう。また、今の季節は6時40分くらいに空が明るくなると高橋が話している(265頁)。東京の日の出時刻が6時40分になるのは12月10日過ぎであり¹¹⁾、その頃を念頭においているとも思われる。しかし、「街ではそろそろクリスマスの商戦が始まっている」(251頁)時期なので、12月中旬以降とは考えにくい。なお、実際の季節ではないが、若い中国人娼婦の名前、郭冬莉の「冬」(64頁)は、売春せざるをえない彼女の身の上を象徴的に表している¹²⁾。

時刻は、各章の最初や途中にアナログ時計の針で表示されており、表1に示したとおりである。1章の最初は午後11時56分で、本文中にも「あとほんの少しで日付が変わろうとしている」(5頁)と書かれている。最後の時計表示は、18章の中の午前6時52分である。最初から最後まで約7時間の物語である。

2. 登場人物と「色」

次に、主な登場人物について、その「色」(=服装や持ち物などの色)とともに整理しておく。「色」に着目するのは、次の理由からである。すなわち、地理学の観点から本作品を分析する場合、空間だけでなく、街の景観について検討することも考えられるが、作品から読み取れる景観像は、あまり具体的ではない¹³⁾。ただし、「景観」の語を拡大解釈し、登場人物の服装や持ち物などの色も色彩景観だとみなして考察範囲に含めれば、分析可能な多様な描写がある。したがって、登場人物の「色」についても、登場人物の性格と関連させながらまとめておきたい。

浅井マリ:作品の主人公で、外国語大学で中国語を勉強している(76頁)。19歳(64頁、76頁、287頁)の大学1年生である(269頁)。数日後には、中国に留学することになっている(269頁)。マリは、女性らしく赤い手帳(271頁)を持ちながらも、少年のように見せるためもあるが(74頁)、秀才タイプのまともな子らしく(79頁、80頁)、黒く短い髪に紺色の野球帽をかぶり、黒縁の眼鏡をかけ、スタジアム・ジャンパーの内側

10) 舞台のひとつである「すかいらく」は、2009年10月に最後の店舗が閉店しているが、当然、作品刊行の後である。後年、疑問とされることもあろうと思われるので、付記しておく。産経新聞2009年10月30日付東京朝刊記事。

11) 2003年の晩秋に東京の日の出時刻が6時40分になるのは12月11日・12日である。「国立天文台天文情報センター暦計算室」サイト(<http://www.nao.ac.jp/koyomi/>)。

12) 本文で後述する中国人娼婦と浅井エリとの同一性に関連して言えば、ベッドで眠っているエリの「まぶたは冬の堅い蕾となって閉じられて」(36頁)おり、エリもまた「冬」の状態である。

13) 街の色彩の描写があるのは、ホテルの「紫色のネオン」(214頁)だけである。

はフード付きのグレーのパーカー、下はブルージーンズという地味な格好で、茶色い革のショルダーバッグを持つ（6頁）。しかし、「色のあせた黄色いスニーカー」（6頁）をはいているところに、マリの内面の危機が示されている。「黄色いスニーカー」という表現は3回も登場し（6頁、188頁、276頁）、村上の意図的使用がうかがわれる。夜が明けた後、マリは黄色いスニーカーが汚れていないことを確かめるが（276頁）、夜の冒険を無事に終えたことが象徴されている。最後のほうで記される内側の服装は、白いスポーツ・ソックスと白いTシャツで（252頁、278頁）、「闇」の世界に侵入されなかったことを表しているようにも見える。

高橋テツヤ：法学部の大学生だが（133頁）、バンドでトロンボーンを吹いている（28頁）。就職せずに、これから司法試験を目指す（133頁）。浅井エリとは高校時代の同級生で（18頁）、マリとも2年前にプールで会ったことがある（14頁）。マリと3回にわたって長時間の会話をする。マリと並ぶ主人公の高橋は、黒い革のハーフコートに、オリーブ・グリーン色のチノパンツ、茶色のワークブーツという格好である（8頁）。コートの下には緑色の丸首セーターを着ており（14頁）、オレンジ色のスウォッチの腕時計をしている（123頁）。黒いコートを着て、黒い楽器ケースを持ってはいるが（8頁）、「緑色」の服装が特徴的である。後にも述べるが、「緑色」は、マリにとって救いや助けとなる人柄を表示しているように思われる。

浅井エリ：マリより二つ年上（231頁）の姉で、21歳の大学生だが（235頁）、中学生のころからモデルをしている（79頁）。2か月ほど前からずっと眠り続けている（231頁）。彼女の部屋は、若い女の子の部屋らしくなく、飾り気がない（37頁）。色の叙述とえば、「シンプルな黒い電気スタンド」（37頁）、「黒い真四角なソニーのテレビ」（39頁）、「真っ白な無地のベッドカバー」（37～38頁）で、部屋は「白黒」の世界である。高橋は、エリが別の「アルファヴィル」みたいなところで苦しんでいるのではないかと比喩的に話しているが（187頁）、それが白黒映画『アルファヴィル』の世界だとすれば、エリの部屋の色彩はそれにふさわしい。そして、彼女の体自身も「白黒」で表現される。黒い髪が枕の上に広がるが（35頁、73頁、255頁、287頁）、ほっそりとした白い首（36頁）で手も白く（155頁）、「白雪姫」（79頁、169頁、185頁）のように美しい。しかし、生気は感じられない。「白」がエリを表示していると考えれば、公園でマリが膝の上に載せてサンドイッチを食べさせ、温かみを手の中に感じる「白い子猫」（167頁）も、エリを暗示しているとも読める。非現実空間で目覚めたエリは、ブルーの無地のパジャマを着ているが（157～158頁）¹⁴⁾、それは静謐さを感じさせる。そのエリが4月に高橋と会った時に飲んだブラディーマリー（174頁）¹⁵⁾の赤い色は、エリが「見えない血を流して」（187頁）苦しんでいることを連想させ、また、「裸で血

14) Google の画像検索によれば、白雪姫の上半身は青の衣装のことが多い。

15) トマトジュースを使ったカクテルで、赤い色をしている。

を流していた」(186頁) 中国人娼婦を想起させる¹⁶⁾。

カオル:ラブホテル「アルファヴィル」のマネージャーをしている(49頁)。長い間、女子プロレスをしていた(85頁)。高橋は、このホテルで半年近くアルバイトしていたことがある(146頁)。バーでマリと二人きりで話をする。カオルは、派手だが短い金髪の上に黒い毛糸の帽子をかぶっている。革のジャンパーに、オレンジ色のズボン(44～45頁)という服装である。肩には、プロレスラー時代に入れた赤いさそりの入れ墨がある(85頁)。ラブホテル関係者らしい派手さはあるが、しっかりした性格も感じられる。

コオロギ:ホテル「アルファヴィル」で1年半近く働いている(223頁)。高校卒業後、会社のOLとして働いていたが(226頁)、ささいなことで3年近く逃げている(225頁)。マリとホテルの客室で身の上話をする。彼女は、同じラブホテル関係者でも、カオルの金髪やコムギの真っ赤な髪(50頁、51頁)と違って、黒い髪をしている(51頁)。黒い髪は堅気の仕事をしていたことの表れであろう。

白川:深夜にコンピュータの仕事をする会社員だが、ホテル「アルファヴィル」に中国人娼婦を呼び、暴力をふるう。中国人娼婦を除いて、他の主な登場人物とは直接接触することがない。白川は、革靴は茶色だが(193頁)、淡いグレーのトレンチコート(100頁、196頁)、淡いグレーのシャツ、紺のペイズリー柄のネクタイという服装で(191頁)、金属縁の眼鏡をかけている(100頁)。使っている鉛筆は銀色で(115頁、192頁)、「グレー」や「銀色」が基調になっている。そして、オフィスで使うフェイス・タオルの色は白(190頁)、帰宅後に食べるのはプレーン・ヨーグルト(220頁)、名前もまさに「白川」と、「白」がもうひとつのベースである。清水が指摘するように、白川は、深い感情を持たない白黒映画『アルファヴィル』的人物であるが¹⁷⁾、「グレー」や「白」中心の描写は、そのような性格を表現している。

ところで、清水は、鏡に映る残像から、白川の二重性がマリと共通点を持っていると言っている¹⁸⁾。村上自身も、「僕は、白川という男を純粋な悪だとは思わないんです。もちろん彼はきわめて危険なものを体内に抱え込んでいるけれど、それはある意味では世間のほとんどの人が抱えている問題を、増幅したものにすぎないわけです」と述べており¹⁹⁾、白川とマリ(を含む他者)との共通性を否定しない。色において見てみても、白

16) 「郭冬莉」という中国人娼婦の名前がマリ・エリと共通の音を持ち、それが3人の類似性を示唆していることは、水牛や鈴村の指摘を待たなくてもいい。(1) 水牛健太郎「過去 メタファー 中国——ある『アフターダーク』論」、群像60(6)、2005、171-172頁。(2) 前掲注3)、150頁。また、渥美も、エリ・マリと郭冬莉の同一性を言う。(3) 渥美孝子「村上春樹『アフターダーク』の居場所——アダルト・チルドレンと監視社会と」、社会文学28、2008、104頁。他にも、「かたちのいい乳房」(55頁)、「かたちのいい乳房」(162頁)というほとんど同じ形容が、中国人娼婦とエリに用いられている。

17) 清水良典『村上春樹はくせになる』朝日新聞社、2006、219-220頁。当該の「終章 鏡よ、鏡よ! : 『アフターダーク』」は、今井清人編『村上春樹スタディーズ2005 - 2007』若草書房、2008に所収。

18) 前掲注17)、222頁。

19) 前掲注9)、181頁。「1Q84」でも、我々一人ひとりの中に潜んでいるはずの暗闇のようなものを問題にしたかったという。「村上春樹ロングインタビュー」、考える人2010年夏号、2010、33頁。

川の色は、上述のマリの色と通じる面がある。すなわち、服装はともに「グレー」と「紺」の組み合わせで、「茶色」の革カバンも同じである。マリの内側の服装は「白」で、「白」は白川のベースの色でもある。また、白川は帰宅して、冷蔵庫からペリエの瓶を出して飲むが（251頁）、マリもバーでライムの入ったペリエを飲む（75頁）。

そのペリエの瓶の色が「緑色」である（251頁）。白川は、「緑色」のペリエの瓶で手の痛みを冷やす。悩みを抱えて夜の街に入り込んだマリは、ペリエを飲みながらカオルと腹をわった話をし、「緑色」の服装をした高橋とも会話を重ねる。白川に身ぐるみはがされた中国人娼婦にカオルが渡すジャージの色も「緑色」である（59頁）。「緑色」は救いや助けの象徴と言える。

中国人娼婦（郭冬莉）：ホテル「アルファヴィル」で白川に暴力をふるわれ、カオルやマリに面倒をみてもらう。白川が奪った（娼婦が着ていた）服装は、クリーム色の薄いコート、濃いピンクの丸首セーター、刺繍の入った白いブラウス、ブルーのタイトなミニスカート、黒いパンティーストッキング、赤いローヒールの靴、きつい色合いのピンクの下着で、黒い人造革のバッグ、茶色の革の財布を持っていた（193～194頁）。赤やピンクといった、いかにも娼婦らしい派手な色合いである。コートの「クリーム色」は、エリの部屋の窓に下ろされたシェードの色でもあり（286頁）、黒く長い髪（54頁）とともに、エリと中国人娼婦との同一性がここでも確認できる。また、「ブルー」のジーンズ（マリ）、パジャマ（エリ）、スカート（中国人娼婦）という3人の共通性も指摘できよう（ただし、コムギや中国人組織の男もブルージーンズではあるが）。

中国人組織の男：中国人娼婦を管理する。会話場面に出てくるのは2回だけだが、バイク姿として二度、携帯電話の話し声として二度登場する。彼は、茶髪だが黒い革のジャンパーとブルージーンズ（64頁）、真っ黒なバイク（145頁、200頁）というように、「黒」を基調にして描かれており、「闇」の世界の人間であることを表示している。また、彼の声が流れる携帯電話は、もとは中国人娼婦のものだが、「銀色」（199頁、256頁）で、保冷ケースに長く置かれていたため、冷たくなっている（257頁）。中国人組織の冷徹さを象徴しているかのようである。なお、中国人組織ではないが、深海の生き物にたとえられる街中の自動車も「黒のワゴン車」で、窓ガラスに「真っ黒なフィルム」が貼られている（4頁）。

以上のように、登場人物によって、服装や持ち物などに、かなり「色」の違いがあり、それは各人物の性格を反映していることが確認できる。その一方で、エリと中国人娼婦との同一性や、一見対極にあるように見える白川とマリとの共通点も指摘できる。

Ⅲ. 場所の設定

1. 全体の舞台と方向性

次に、場所の設定について検討する。自宅で眠り続けているエリを除けば、『アフター

ダーク』全体の主な舞台は、マリが朝、急行電車に乗って「日吉」(27頁)への家路につく一方で、高橋が「JRの駅に向かって歩いていく」(276頁)という描写から、東急東横線とJRの駅である渋谷駅周辺かと思われる²⁰⁾。

しかし、村上本人は、「小説の舞台になっている街も、架空の街」であり、「渋谷ですかとか、新宿ですかとか、よくきかれるんだけど、要するにアルファヴィルです」と述べている²¹⁾。なぜ村上は「渋谷」と記さなかったのであろうか。筆者が推測するに、村上は、現実の渋谷の街自体からわき起こるさまざまなイメージを避けたかったのではなかろうか²²⁾。また、ファミリーレストランやコンビニなどが実在の施設と比定されて、そこから違うイメージを持たれることをおそれたと考えられる。

実際のところ、上述のように舞台が渋谷と推定されるのは、物語の最後に近い第17章の駅の場面であり、それまでは、「品川」「日吉」「高円寺」などの断片的な地名から東京のどこかの繁華街と推測されるだけである。また、舞台が渋谷だとしても、作品中の施設が現実の施設ときちんと比定できるわけではない。「東京紅團」サイトは、登場するファミリーレストランやコンビニ、公園などを同定しているが、納得がいくものではない。主要な舞台であるラブホテルは円山町のラブホテル街を念頭に置いていると考えたくなるが、本文中には「ホテル街」という言葉はなく、他のラブホテルも登場しない。駅自体も、「日吉」という目的地を考慮しなければ、高橋が「JRの改札」ではなく「JRの駅」に向かって歩いていくという記述から、西武新宿駅からJR新宿駅へ移動しているとも解釈できる。実際、高橋は新宿から中央線に乗る(263頁)。そう考えると、『アフターダーク』は、渋谷と新宿が一体となったような架空の街を舞台にしているとも言える²³⁾。以下、本稿では、渋谷を念頭に置いた架空の場所という意味で、全体の主な舞台を〈渋谷〉と記すことにする。

本文中に実際に出てくる地名としては、まず登場人物の自宅住所がある。マリは「日吉」(27頁)、高橋は「高円寺」(28頁)、カオルは「代々木」(87頁)、白川は「哲学堂」(197頁)に自宅がある²⁴⁾。コオロギの自宅住所と中国人組織の場所は記されていない。しかし、

20) 前掲注6)の「東京紅團」サイトも同じ指摘をしている。ただし、藤井は、新宿歌舞伎町が舞台だとしている。藤井省三『村上春樹のなかの中国』朝日新聞社、2007、71頁。

21) 前掲注9)、177頁。

22) 浦澄は、村上が札幌や芦屋を実際とは違う人工都市として描いているとするが、舞台となる都市の名前を記さなければ、そのようなギャップを生じることもなくなる。前掲注7)、113-133頁。

23) 鈴木も、「『渋谷』とだいたい同定できるんですけども、そうは書かれていない。渋谷だけれども渋谷ではないのです。村上春樹の場所ということ考えた場合、具体的な名前前で固定することができないんです」と述べている。前掲注3)、148頁。また、斎藤も、「そもそも村上春樹にロケーションへのこだわりがあるかという問題はあよね。基本的には匿名性が高い場所で展開されている」と指摘し、それを受けて市川も、「匿名的」であること、「こだわりのなさ」を、『1Q84』の高円寺や『アフターダーク』のファミレスを例に述べている。福田和也・斎藤環・市川真人「村上春樹のゼロ年代——身体・子ども・悪をめぐる」、ユリイカ2011年1月臨時増刊号、2010、68頁。

24) 白川の自宅は哲学堂で、「通り沿いに昭和シェルのガソリンスタンドがあって、その少し先」(200頁)だと記述されている。前掲注6)の「東京紅團」サイトによれば、哲学堂の横にセルフの昭和シェルのガソリンスタンドが実在するとのこと、これは、哲学堂公園から道路をはさんで西側にある昭和シェル石油「哲学堂サービスステーション」(中野区松ヶ丘2丁目25番)のことである。

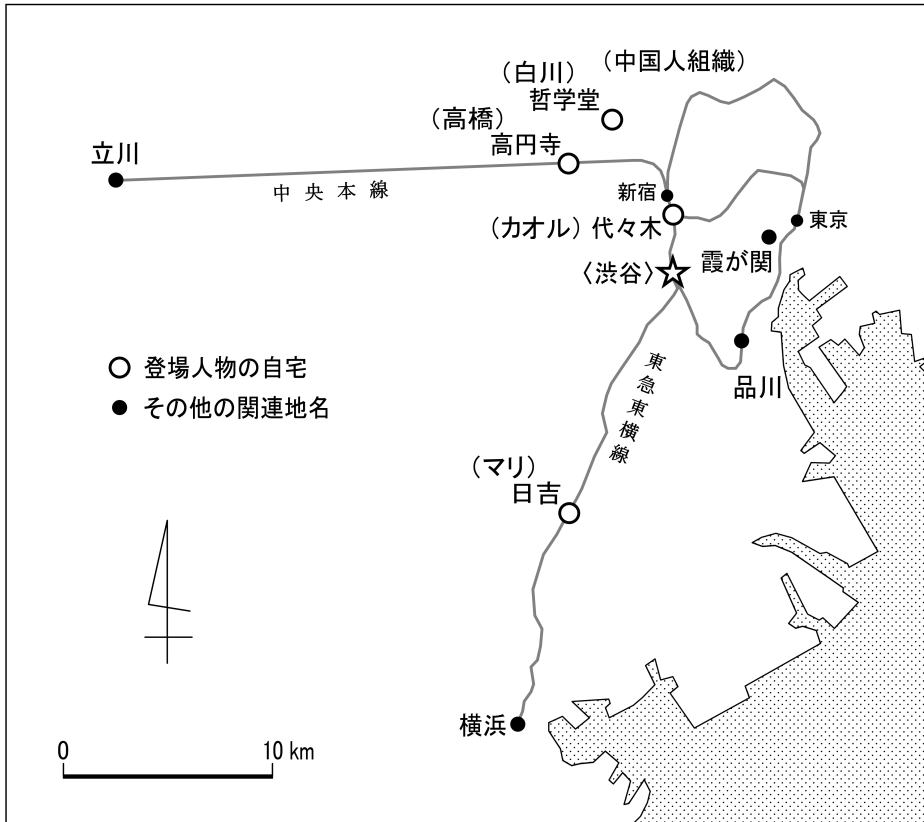


図1 『アフターダーク』中の地名の位置

白川がタクシーで帰る途中、大きな交差点の赤信号で、白川の乗ったタクシーと中国人の乗ったバイクが並んだ後、バイクはそのまま直進し、タクシーは左折しているから(200～201頁)、中国人組織の場所は、北方にあるものと推測される。さらに、電話から10分でホテル「アルファヴィル」に来ているから(109頁)、数キロの距離にあると考えられる。

以上の地名の位置を地図に落とすと、図1のようになる。〈渋谷〉は渋谷の位置にした。ここから気がつくのは、〈渋谷〉から見て、マリの「自分の場所」(286頁)である「日吉」の遠さと、「夜の人々」(286頁)の住むところの近さである。〈渋谷〉は、マリにとって「いつもとは違う場所」「自分のテリトリーを外れた領域」(268頁)なのである。

距離だけでなく、登場人物の方向性の相違も指摘できよう。すなわち、〈渋谷〉の南南西にマリ、北西に高橋、北北西に白川、すぐ北にカオル、数キロ離れた北に中国人組

織の領域がある²⁵⁾。カオルはすぐ北の代々木にアパートがあるが、「ホテルの仮眠室で寝て、起きてそのまま仕事をする事の方が多い」(87頁)生活で、〈渋谷〉がテリトリーと言うこともできるかもしれない。また、マリは、中国人組織からいちばん遠いところにいると解釈することもできよう。

他の地名にも目を向けたい。マリに関係する地名として「横浜」がある。「横浜」は、マリが小学校三年生から中学・高校まで通った、中国人の子供たちのための学校があるところである(78～79頁)。上述のように、〈渋谷〉の南にマリの領域が設定されており、それを延長する形で「横浜」までがマリのテリトリーになっていると考えられる。

同じ姉妹でも姉のエリは、「東京」の高校に通っていたと思われる(149頁)。マリとは逆に、自宅から北の方向を志向していたと言える。

高橋に関係する地名としては、自宅アパートのある「高円寺」と高校のある「東京」以外に、裁判を傍聴した東京地方裁判所の「霞が関」(135頁)と、裁かれた放火殺人事件の場所「立川」(139頁)がある。事件の場所がなぜ「立川」なのかを考えると、東京地方裁判所の支部が立川にあることから出てきた地名かもしれないが、「高円寺」の西方に位置させることで、〈渋谷〉の北西にのびる高橋の方向性に合致するとも言える。また、「立川」で起きた事件が「霞が関」で裁かれるわけだが、「高円寺」は両者を結ぶ線上にあり、高橋が裁判に影響を受けたことを象徴的に表しているとも言えよう。

そして、マリ・エリと高橋の以前の接点として「品川」がある。3人は、2年前の夏に、「品川」のホテルのプールで一緒になった(14頁)。「品川」は、マリ・エリの自宅「日吉」と高橋の「高円寺」からはほぼ等距離である。また、過去の領域を〈渋谷〉から東に置いたとも考えられる。他の過去の場所と言えば、高橋が「霞が関」の東京地方裁判所に通ったのは、4月から6月にかけてと半年前のことであつたし(135頁)、高橋が「下町」に一人で住んでいたのも7歳の時であつた(208頁)。

2. 〈渋谷〉内部の施設の位置

次に、〈渋谷〉内部の施設の位置について検討する。主な施設は、表1の場所欄にあるように、ホテル「アルファヴィル」、「デニーズ」、「すかいらく」、公園、バー、「セブンイレブン」、バンドの練習場、白川のオフィスである。これらの位置関係は明確には記されていないので、以下、断片的な記述から分かることを示す。

まず、ホテル「アルファヴィル」へ行くには、「繁華街から逸れて細い道に入り、坂道を上って……人気のない暗い階段を上り、別の通りに入る」(49頁)というのが特徴的である。マリとカオルが「デニーズ」からホテルへ行く時(上記)と、ホテルからバーへ行く時(74頁)、そして、マリと高橋が公園からホテルへ行く時(214頁)の

25) 偶然かもしれないが、中国人娼婦が「北の方の出身」(60頁)とされていることとも呼応する。

3回、この階段は登場している。階段が別世界への移行を象徴していることは自明であろう。

次に公園は、「公園から出て、街の明るい方に向かう」(203頁)、「街の中心部に戻る」(204頁)という表現から、街の中心部から離れた場所に位置していると推定される。「すかいらーく」からは散歩の感覚で「少し歩いたところ」(145頁)にある。また、ホテルからは歩いて10分の距離である(261頁)。

逆に、「デニーズ」は、「にぎやかな通り」(7頁)に面し、深夜12時を過ぎても「外の通りはまだ相変わらずにぎやか」(47頁)なところにある。おそらく駅の近くであろう。同じファミリーレストランの「すかいらーく」はバーの近くにある(89頁)。そのバーは、ホテルから階段を下りた後にある(74頁)。

「セブンイレブン」は、朝5時過ぎに高橋が買い物をした後、ホテルへ行く前に、公園からマリンに電話をしていることから、公園の近くでないといけない。高橋は、バンドの練習の休憩時間と終了後、2回も「セブンイレブン」に立ち寄っているから、バンドの練習場も「セブンイレブン」の近くであろう。

白川のオフィスも「セブンイレブン」の近くと考えられる。白川は、タカナシのローファット牛乳が、そこにしかたぶん売っていないということを知っており(198頁)、よく利用する店舗だと思われる。

以上の記述に加えて、下記のような推測を行ない、施設の位置を図2のように地図化した。

まず全体の位置だが、現実の渋谷を舞台に利用するとして、施設の位置を駅の東側に想定することもできる。しかし、過去の出来事の舞台を〈渋谷〉から東に置いたのではないかという上記の推定から、物語内の施設を駅の西側に位置させることにした。

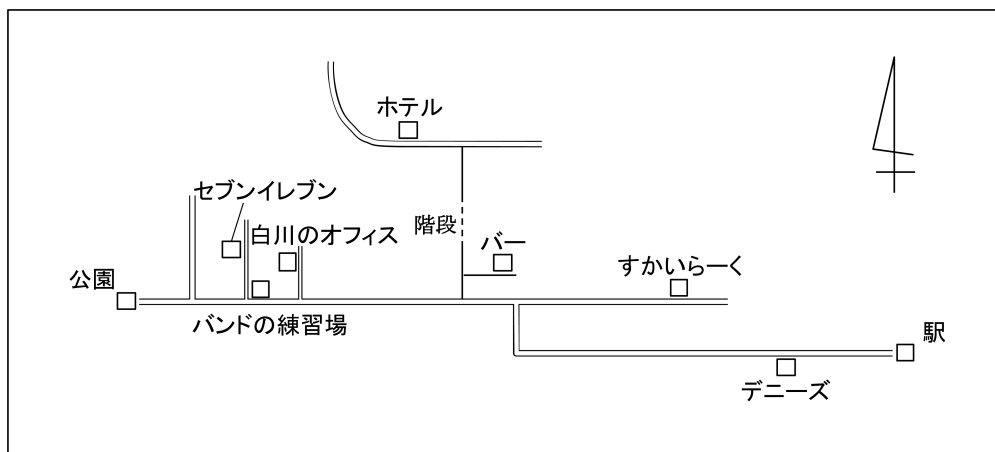


図2 『アフターダーク』中の施設の位置

「デニーズ」は、マリが最初にもずから選んだ、夜を過ごす予定の場所である。恐る恐る夜の世界に足を踏み入れたと考えるならば、その位置は駅に近いとするのが妥当であろう。これに対して、カオルの知り合いが店長をしている「すかいらく」は、同じファミリーレストランであっても、相対的にホテルに近いはずである。ただし、ファミリーレストランは、「真夜中の街の闇の深さも、ここまでは入ってこられない」（92～93頁）場所である。高橋がトーストを「黒こげになる寸前くらいに」（13頁）焼くよう注文しても、注文どおりには焼かれない（17頁）。いわば「闇」からもっとも遠い場所であり、中国人組織の男もここには登場しない。したがって、「すかいらく」がバーの近くだとはいっても、ホテルやバーからは少し距離をおきたい。そして、マリとカオルそれぞれの方向性を考えれば、「デニーズ」は南側に、「すかいらく」は北側にあるものとする。

公園は、高橋の馴染みの場所であり、高橋の方向性に近い西にあるものと考えたい。上記の推定と合わせれば、街の中心部（駅）から最も西に離れたところに位置していると考えべきである。

ホテル「アルファヴィル」は、円山町のラブホテル街を連想すると、街の西方に置きたくなる。しかし、マリと高橋が、「すかいらく」からホテルを通らずに公園に行っていること、2人が公園からホテルへ行く時に階段を通っていることから、西方への一本道上にホテルと公園は置けない。西にのびる2本のルートを考えることも可能だが、ホテル「アルファヴィル」のマネージャーであるカオルは北への方向性を持つから、ここではホテルが街の北方にあると考えたい。そして、中国人組織の男が（おそらく北から）バイクでやって来る道が前を通っているはずである。

公園、「セブンイレブン」、バンドの練習場、白川のオフィスは、いずれも相互に近いと思われる。白川は北北西の方向性を持つから、白川のオフィスは、高橋のテリトリーである公園やバンドの練習場より北に位置しよう。ただし、「セブンイレブン」は、白川の帰りのタクシーで示されているように、交差点を右に曲がってしばらく進んだ位置にあること（198頁）、その道は先が一方通行になっていて広い幹線道路とは思えないこと（すなわち、他に幹線道路があることが含意されていること）も考慮する必要がある。結果的には、携帯電話が置かれた「セブンイレブン」が、北方の中国人組織の入り口に位置しているようにも見える。

3. 登場人物の空間的移動

上記の施設間を、主な登場人物がどのように移動したかを確認しておく。

主人公のマリは、「デニーズ」→ホテル「アルファヴィル」→バー→「すかいらく」→公園→ホテル→駅→自宅と移動する。その大きな特徴は、駅まで常に誰かとともに歩いていることである。「誰か」とは、「すかいらく」まではカオルであり、「すかいらく」からは高橋である。マリは「夜の人々」に守られて夜の街中を移動しており、直

接、危険な目にはあっていない。

高橋は、本作品中で、もっとも行動が複雑な人物である。「デニーズ」→バンドの練習場→コンビニ（セブンイレブン）→「すかいらく」→公園→ホテル→練習場→「セブンイレブン」→公園→ホテル→駅と移動する。カオルは、ホテル→「デニーズ」→ホテル→バー→「すかいらく」→ホテルと、ホテルを中心にした移動をしている。

本書のタイトル「アフターダーク」は、高橋が中学生の時に聞いて感激した「ファイブスポット・アフターダーク」というジャズの曲からとられている（29頁）。「ファイブスポット」の5つの場所というものが構想の段階で意図的に設定されているとするならば、それは、主人公マリの滞在した「デニーズ」、ホテル「アルファヴィル」、バー、「すかいらく」、公園なのではないかと推測しておきたい。

IV. 「闇」との出会い

浦澄は、村上作品の大きなテーマとして「異界との接触」があり、「異界との接点」があるという²⁶⁾。『アフターダーク』にもそれは感じられる。以下、本章では、その接点を探ってみたい。

1. 「闇」との接点——中国人組織と出会う場所

本作品において「異界」、あるいは松本の言う「都市の闇」²⁷⁾とは、具体的には中国人組織が考えられる。「逃げ切れないよ」（256頁）と携帯電話から聞こえる声は不気味である。したがって、「闇」との接点を、中国人組織とどこでどのように接触したのかによって検討する。

中国人組織の男は、II章で述べたように、会話場面で2回、バイク姿として2回、携帯電話の話し声として2回登場する。

1回目は、中国人娼婦をホテル「アルファヴィル」に迎えに来る時である。話の相手をするのはカオルだが、マリもそばにいる（第3章）。2回目も場所はホテル「アルファヴィル」で、この時は、中国人組織の男が白川の写真を取りに来る。ホテル側は、カオルと従業員のコムギが相手をする（第6章）。

3回目は、「すかいらく」から公園へ向かって、マリと高橋が通りを歩いている時に、となりを、中国人の男が運転するバイクが追い越していく（第9章）。4回目は、白川の乗ったタクシーが交差点の赤信号で停止した時に、となりで、中国人の男の乗ったバイクがやはり信号待ちをしている（第12章）。

5回目は、高橋が「セブンイレブン」で買い物をしている時に、白川が置いた携帯電

26) 前掲注7)、82-86頁。

27) 前掲注8)、132頁。

話が鳴り、中国人組織の男の声を聞く（16章）。6回目は、「セブンイレブン」でまた携帯電話が鳴り、店員が男の声を聞く（18章）。

これらは、人々が中国人組織と出会う3つのパターンを示している。第一のパターンは、直接対面し、会話をする。その場所は、売春をなりわいとする組織ゆえに、ラブホテルである（1回目と2回目）²⁸⁾。第二は、双方が知らないうちに路上ですれ違っている（3回目と4回目）。第三は、コンビニエンスストアに置かれた携帯電話を通じて、一方的に声かけられる（5回目と6回目）。

第一のパターンが、いかにも「闇」との接点になりそうなラブホテルを舞台としているのに対して、第二と第三のパターンは、道路やコンビニエンスストアという日常的な場所で起こっている。これは、ある特定の場所のみが「闇」との接点になるのではなく、どこでも「闇」の世界と出会う可能性があるということである。村上が、高橋に「二つの世界（小田注：僕の世界と凶悪犯罪者の世界）を隔てる壁なんてものは、実際には存在しないのかもしれないぞって。もしあったとしても、はりぼてのぺらぺらの壁かもしれない。ひょいともたれかかったとたんに、突き抜けて向こう側に落っこちてしまうようなものかもしれない。というか、僕ら自身の中にあっち側がすでにこっそりと忍び込んできているのに、そのことに気づいていないだけなのかもしれない」（137～138頁）と語らせているのは、これに呼応する。

また、「闇」との接触の仕方も、直接対面するだけでなく、第三のパターンでは携帯電話という現代のメディアによっている。本稿の分析対象からははずしたが、エリが非現実的な「異界」の部屋に移動するのも、テレビ画面を通じてである。

2. 深海（異界）としての深夜の街

今、どこでも「闇」の世界と接触しようと述べたが、「長い闇の時刻」（286頁）すなわち深夜の〈渋谷〉の街全体が異界であるとも言える。カオルが言うように、「終電車が出ちまってから、始発電車がやってくるまで、ここは昼間とはちょっと違う場所になる」（80頁）。そして、「深い裂け目のような場所」が「どこかにこっそりと暗黒の入り口を開く」（254頁）のである。

そこには、「危いやつら」（80頁）もうろうろしている。そういう「お化けみたいなやつ」（112頁）を、村上は深海の生き物にたとえ、「深海に生息する、特別な皮膚と器官をもった生き物」（4～5頁）と表現する。白川とマリ、コオロギが違う場所で同時に見ている『深海の生物たち』というテレビ番組の海底の映像は、深夜の街の姿を暗示している。そこに映し出される「奇妙なかたちをした様々な深海の生き物。醜いもの、美しいもの。捕食するもの、されるもの」（221頁）は、「深夜の都会を住処とする、よく正体のわから

28) 白川は「異界」や「闇」の人間ではないが、映画「アルファヴィル」世界の住人のように情愛のない白川の暴力が発現する場としても、ラブホテルは「闇」との接点と言えるであろう。

ない人々」(85頁)でもある²⁹⁾。深夜の街は深海すなわち異界であり、深夜の街の住人は深海(異界)の生物なのである³⁰⁾。

3. 白い三日月の浮かぶ街

深夜の街が深海にたとえられる一方で、物語では、空に浮かぶ月も描かれる。その月は、「鋭利な刃物」(166頁)のような「白い」(166頁)「三日月」(261頁)である。情愛を思わせる暖かい黄色い満月ではなく、冷たい白い三日月が空にあることは、深夜の街全体が「アルファヴィル」であるとも言える。

その三日月が、早朝に「西の空に浮かんでいる」(285頁)。これは、現実にはありえないことである。早朝に西の空に浮かぶ月は、実際には満月である。異界としての深夜の街には非現実的な三日月が浮かぶという設定になっている。

V. おわりに

以上、本稿では、村上春樹『アフターダーク』を主に空間的な視点から分析した。登場人物の「色」については、性格に応じてかなり使い分けがされていることが明らかとなる一方で、エリと中国人娼婦との同一性や、白川とマリとの色(=性格)の共通点も指摘した。作品全体の主な舞台については、現実の渋谷ではなく、渋谷を念頭に置いた架空の場所が設定されていると推論した。また、登場人物の自宅の位置などを地図化することによって、人物の性格により、〈渋谷〉と自宅との距離や、〈渋谷〉からの方向性に違いがあることを明らかにした。街内部の施設の位置についても検討し、図2のような配置を推定した。IV章では、中国人組織との接触を手がかりに「闇」との出会いについて考え、特定の場所だけでなく、どこでも「闇」の世界と出会う可能性があることや、深夜の街全体が異界として位置づけられていることなどを述べた。

本稿では、通常の地理的スケールに鑑みて、室内空間については分析の対象としなかったが、空間的読解をうたうならば検討の余地はあろう。エリの移動するテレビ画面の中の非現実的部屋も含めて、今後の課題としておきたい。また、中国との関わりも空間的テーマのひとつであり、これまでも論じられてきているが³¹⁾、『アフターダーク』の読解だけではカバーできない大きすぎる問題と判断し、本稿では取り上げなかった。諒とされたい。

29) 村上は、裁判制度も「異様な生き物」「深い海の底に住む巨大なタコ」(138頁)にたとえ、そこから逃れられない恐怖を高橋に語らせる。

30) 清水は、不気味な生物が生息する海が私たちの心のメタファーであるという。前掲注17)、227頁。

31) 前掲注16)(1)、160-173頁。前掲注20)、11-72頁。柴田勝二「遍在する「底」——『ねじまき鳥クロニクル』『アフターダーク』における暴力」、敍説3、2008、113-129頁。後に、柴田勝二『中上健次と村上春樹』東京外国語大学出版会、2009に所収。

〔付記1〕

脱稿後、村上春樹の小説を図学の観点から考察した神山の論考³²⁾に気がついた。神山は、村上作品の空間的特徴を4点挙げ、4番目に、「現実の世界とは思えない空間世界、つまり異界が描かれる」ことを指摘していて興味深い。論文では、3つの小説を取り上げ、異界が物語空間の中のどこにあるのかを図学的方法で検討している。『アフターダーク』も事例の1つに挙がっているのだが、神山の関心は、エリの部屋（現実界）とテレビ画面内の部屋（異界）との関係にあり、本稿の分析とは重なっていない。

〔付記2〕

本稿は、柴田佳美氏の平成21年度駒澤大学文学部地理学科卒業論文「小説の中の都市空間」に示唆を受けて執筆したものである。筆者が村上春樹『アフターダーク』を読むきっかけを与えてくれた氏に感謝したい。念のために付言すれば、本稿は、氏の卒論とはまったく別個のものである。

32) 神山真理「物語に表現される空間の図学的考察——村上春樹の小説を示例として」、(日本大学) 国際関係学部研究年報 29、2008、65-82頁。

**Spatial Analysis of Murakami Haruki's "After Dark" :
Midnight town as a place where we encounter the "darkness"**

ODA Masayasu

This paper analyses Murakami Haruki's "After Dark" mainly from the spatial viewpoint. Findings obtained are as follows:

1. It is made clear that the colors of the clothes and belongings of the characters respond to their personalities. Meanwhile, it is pointed out that Eri has a similarity to the Chinese prostitute and Shirakawa and Mari have something in common in colors, that is, in personality.

2. The author supposes the main story is not set in actual Shibuya, but in a fictitious town with Shibuya in mind, which he calls "Shibuya."

3. The mapping of the homes of the characters makes clear that according to the personalities, there is a difference between the distances from "Shibuya" to their homes and between those directions.

4. The location of the facilities in the town is examined and shown as a map.

5. As a result of considering the contact with the Chinese criminal organization, it is supposed that we encounter the "darkness" anywhere as well as in particular places, and the whole midnight town itself is an alien world.

Keywords: Murakami Haruki, "After Dark," space, color, town, literary geography